

---

# 平成マシンガンピックアップブルース

俺とキルマシーン

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

平成マシンガンピッキングブルース

### 【コード】

N1000E

### 【作者名】

俺とキルマシーン

### 【あらすじ】

彼の評価は、彼女にとって弾丸だった。

## 1 ブラックコーヒーロマンス

また、始まったよ。

初秋。九月半ばのこの時期は、来るべき文化祭に向けての準備が忙しくなる時期だ。

有原誠ありはらまことが所属する部活・文藝部も毎年恒例の小冊子作りに追われていた。

文藝部の部員数は四名なのだが、部室にいる人数は六名だ。

有原誠ありはらまことと笠原愛かさはらあいは興味本位ながらも正式に入部しており、何の問題もない。

ただ、堂島礼二どうじまれいじと伊藤悠里いとうゆうりはサボりの場所として居座っている。部員数と室内利用者が合わないのは、この二人が原因だ。

しかし、正直なところ、この二人は居ても居なくてもいい存在なわけで、部室を利用する者達からすれば、最も居てほしくない人物は、部長の太宰人志だざいひひとしだったりする。

口煩いことで有名な人志なのだが、特にこの文化祭準備期間中最も彼の言動を過剰にさせる。

理由は一つ、小冊子に掲載する作品を厳密に評価するからだ。

それ自体は良い事なのだが、人志の場合、それが少々行き過ぎているため、部員達の士気を下げる結果となっている。

中でも、部のみならず学校全体として見ても、重度の内気と言え折笠眞弓おりかさまゆみは常に人志から批評を受けている状態だ。

そして、今日も、また批評を受けていた。

「折笠君の小説はさ、文章の基本的な作法がなってないんだよ。これじゃあ、読者は見てくれないよ」

二台の折りたたみ式テーブルを並列させ、その上で殆んどのやり

取りが行なわれている。

しかし、このチェックの作業の時だけは違う。

眞弓は自分の席を立ち、反対側に座る人志の元に歩み寄った。

直後、眞弓は人志から、数十枚の原稿用紙を突き返された。

書き直し、ということだ。

そう、チェックの作業の時は、部長の元まで手渡しするのが部の中の暗黙のルール。それ以外では受け取らないのだ。

眞弓は原稿用紙を胸に抱き締めた。

「ありがとうございます」

眞弓の内気が少しだけ解ける時がある。それは、人志から評価を受けている時である。

文化祭まで残り一ヶ月。

文藝部の小冊子に掲載する作品は、まだ一つも決定していない。

## 1 ヲラックコーヒーロマンス（後書き）

こんにちは、作者の谷渕流です。

懲りずにまた新連載を始めました。

前作と違い、今作はちゃんとテーマがあるのですが、敢えて書きません。

読んでいく内にそれを感じ取ってもらえたら幸いです。

全十話完結予定です。最後まで読み続けてもらえると嬉しいのです！

それでは、短い間となりますが、よろしく願いします！

ちなみに毎日更新します！

## 2 / 無糖に角砂糖は要らない

後十数分で部活動終了時間が訪れるため、ちらほらと帰りの身支度を始めていた。

木製のロッカーの中から、各自スクールバッグを取り出す。表側には金銀色の糸で刺繍された校章が付いており、裏側には『本堂』の名がアルファベットの太文字で記されている。

部員でない礼二と悠里の二人は、スクールバッグをロッカーに蔵しまつておらず、テーブルの上に出したまんまの状態だ。

部員である誠と愛と眞弓と人志は、取り出したスクールバッグの中に持参した荷物をまとめている。

その間、礼二と悠里は挨拶の一つもなしに部室を後にしていた。

人志は二人が帰ったのを横目で確認している。

「ようやく帰ったか。まったく、こう毎日と部室に来てはイチヤイチャされて困る。そう思うだろう、誠」

仏頂面で愚痴を溢す人志を、誠は困惑した表情で苦笑いをしながら聴いていた。

誠はどこをとっても平均的な印象のある学生だ。どんな状況でも中立的な意見を述べる。

「まあ、そういうのに無縁な僕達からすれば少しね。でも、むこうだって悪気あって居るわけじゃないんだから仕方ないよ」

「そうそう。有原の言う通り」

愛が話に割り込んできた。

身長一六三センチ、黒髪のショートにはカチューシャがついてい

る。

親しみやすい性格をした愛なのだが、恋愛関係にまでは発展したことはなく、友達止まりという印象が定着していた。

小生意気な一面もあるためか、人志とはあまり仲良くない。

「ていうかそれ、ただの嫉妬じゃん」

「い、言い過ぎだって、笠原さん」

慌てふためく誠をよそに、眞弓がこつそりと何も言わずに部屋から出ていった。

愛と人志が激しく意見を対立させている中、仲裁に入っていた誠は眞弓が帰ったことに気づいた。

本堂高校前のバス停に誠と人志は並んでいた。

現刻は午後六時を回り、景色はすっかりと茜色に暮れていた。

校舎の方を振り向けば、まだ教室から点々と明かりが差し出ていた。

「さっきの言い過ぎだったんじゃない？」

誠がそう切り出すと、人志は時刻表を見るのをやめ、誠の方を向いた。

「さっき？ 笠原と言い合いなつた時か？」

「違うよ。折笠さんの作品をチェックした時だよ」

ああ、と呟き、人志は言われた内容を思い出す。

「別に言い過ぎたつもりはないが？ 事実を述べたまでだ」

「人志が言ってた通り、折笠さんの作品は文章がなってないのかもしれないけど、それで読まれないってことはないんじゃないかな？

僕や笠原さんは普通に読めたよ」

会話の途中、坂の向こう側からバスの顔が現れた。

「それは、普段から誠や笠原が文章の作法がなってない小説を読んでいるからだ。俺からすれば、折笠君の作品は小説の形をしていない」

バスが停車し、エンジンをふかした状態で開閉のブザーを鳴らし、直後、空気を抜いた音と共にドアを開く。

先頭に立つ人志が段差に足を踏み入れる。後に続くように誠も足を踏み入れ、開閉のブザーと共にドアが閉まる。

そして、バスは走り出す。

### 3 スカイブルーハーツ

一週間が経過した今日、文藝部員達の小冊子作りは佳境を迎えていた。

誠と愛と人志の小説は既に完成しており、残すは眞弓一人となっていた。

今日は一段と部室の空気が重い。

誠と愛は進学希望のため、問題集を解いていた。礼二と悠里は携帯電話の写真を見せ合いながら笑っている。

人志は眞弓と隣席になり、間近で原稿用紙をチェックしていた。

誠も愛もこの重苦しい光景をかれこれ三日は間のあたりに行っている。重い空気の原因は間違いなく、この重苦しい光景のせいと言えよう。

「それ使い方間違ってるから」

臨席されている以上、常に監視された状態であるため、このように指摘を度々受けている。

疲れた様子で指摘するものだから、眞弓も余計な気を遣ってしまふのかもしれない。

それは、本人にとってマイナスなことである。

「ハア……」

人志は大きく溜め息をつき、悩ましげに手で頭を抱えながら、

「ちょっと外の空気を吸ってくる」

そう口にし、パイプ椅子を後ろへ引いて立ち上がり、散漫な気持

ちを胸に部室を後にした。

心配そうに人志を目で追う誠だが、その心配は別の方へと向けられた。

人志が部室を後にしてから二つ間が空いた後、眞弓は筆記具をテーブルに置き、顔をうつ伏せてしまったのだ。

華奢な腕に閉ざされたその中からは、鼻水を啜り泣く声<sup>すす</sup>が聞こえた。

泣いてしまったようだ。

愛は問題集を解く手を止めて、呆然した表情のまま見入っていた。礼二と悠里も気づきはしたが大して興味はないらしく、すぐに携帯の画面に視線を戻していた。

「だ、大丈夫!? 折笠さん!」

誠は席を立ち、反対側に座る眞弓の傍に駆け寄った。愛も誠の後を追う。

二人が傍についても一向に泣き止む気配はなく、困りきった表情を合わせていた。

「ごめんなさい」

眞弓は顔を表にし、ポケットから取り出したハンカチで淡紅色に染まった鼻を押さえながら、そう口にした。

涙で潤んだ瞳は少し充血した感じで、尚も涙は流れている。

誠はこういった状況に慣れていないのか、掛ける言葉を見い出せずにいた。

「いいよ。気にしないで」

それとは対象的に、愛は優しく声を掛けて背中を軽く擦っていた。

次第に眞弓の顔から安堵の色が見られるようになってきた。

「ほら、早く顔洗いに行こう」

愛は眞弓の手を引き、眞弓はもたついた足取りのまま部室を後にする。

二人が出ていく姿を確認し終わると、誠は何も言わずに自分の席に座り、眞弓の座っていた席をずっと眺めていた。

「ねえ、太宰って何であんな威張ってるの？」

悠里がそう訊いてきた。彼女は黒髪のセミロングで学校の規定外の白いセーターを着ている。見た目からだらしない印象が強く出ている。

「えっ、別に威張ってるわけじゃないと思うけど……」

愛とは違ったタイプの異性であるためか、誠は釈然としない態度で話していた。

「ふーん、てか、よくあんなの言うこと聞けるね。アタシだったら絶対無理だわ」

謝りなさいよ！

廊下から愛の怒鳴り声が聞こえた。誠は努気に背筋を震わせる。急いで廊下を確認しに向かった。

当然、怒りの矛先は人志だろう。誠は頭の片隅でそう思い、長い廊下の先を見た。

案の定、やはり怒りの矛先は人志に向けられていた。女子トイレ

の入り口の前であたふたする眞弓をよそに、愛と人志は一触即発の状態になっている。

愛は今にも手が出そうな感じだが、人志はそんな素振りが一つも感じられず、それどころか喧嘩を買っ気すらないご様子だ。

馬鹿を相手にする天才と言ったところか。

「何で俺が謝らなければならない。俺が折笠君に何か悪いことでもしたか？」

「したでしょう！ 何度も何度も批評して！」

誠は急いで駆けつけ、言い合い真っ最中の二人の間に割って入った。

「ちょっと二人共落ち着いて」

しかし、両者共々誠の声は届かず、言い合いは更に加熱するばかりだ。

「俺だつて好きで批評しているわけではない。面白い作品なら批評は付けないさ」

人志はその場に背を向け、

「それとも何か？ 相手のためを思って面白くもない作品を“面白い”と評価するのか？」

そのまま部室に戻っていった。愛は怒りをぶつけるように、その場を思いつきり足踏んだ。

平成マシンガンピッキングブルース

「俺は、君達のご機嫌を取るために評価はしない」

#### 4 変速ギアガール

翌日、文藝部に眞弓の姿は無かった。どうやら、体調不良で学校自体を休んでいたようだ。

そのため、本日の部活動は中止となった。眞弓以外の部員は全員、文化祭の出し物である小冊子用の小説を完成させているので。

人志は文化祭実行委員の方に用事があるらしいので、誠は愛と帰ることにした。

実はこの二人、誰にも内緒で付き合っているのだ。それも中学三年からずっと。

しかし、高校に入って文藝部に入ってからというもの、二人だけで帰れたことがない。何故なら帰りは常に人志の存在が付いてくるからだ。

アイツに言うとな何を言われるか分からないから。愛は人志を悪友扱いしている。

今日はバスを使わず、愛が乗っている自転車で帰ることにしたようだ。

校舎裏に設置された駐輪場まで足を運ぶ二人。運動系の部員達の叫び声に会話を遮られ、顔を合わせ苦笑する。

車体が水色のその自転車は後部座席がなく、二人乗りが困難なタイプだ。

参考書の購入がてら、デパートで遊んで行こう。愛は誠のスクールバックを自分のバックと共に籠に入れた。

自転車を押して引っ張っていく形で裏門から出る。

愛の性格でなくてもそこそこ仲が良ければ、クラスの女子と二人乗りくらいしても怪しまれないだろう。

だが、誠と愛の二人の場合、最初から二人乗りなど不要だったようだ。

午後十一時過ぎ。外はすっかり真っ暗になり、ほとんどの家が就寝の時間となっていた。

まだ夏の暑さが残っており、低めに温度設定した冷房を付けてもいいくらいだ。

その部屋は六畳一間の狭い面積だが、子供部屋としてなら不自由は少なからう。

一通りの家具と勉強机が配置されたその部屋は特別女性らしさがあるわけでもなく、かといって男性らしいというわけでもない、どこをとつても中性的な印象のある部屋だった。

しかし、唯一、そこだけが違う印象を見受けられた。

勉強机だ。腰掛けるその後ろ姿を見る限りでは女性のような。

ぐったりと片腕を地面に垂らした状態で、しかも、寝ているのか机に顔を伏せた状態で座っている。

机には、原稿用紙が十数枚重ねられた状態で置かれているが、彼女の頭が乗っかっていて一点に皺が寄っていた。

ピンク色のビニール製のペンケース。ノートや参考書類が縦に整理され並べられている。ここまで見る限りではそう珍しい印象は受けないだろう。

だが、折れたカッターの刃の破片が乱雑に散らばっていたらどう印象を受けるだろうか。

それも、その中の一枚に血と見られる液体が付着していたら。

地面に垂れた片腕の手首には血が固まっていた。

血の状態から見ても、今さっき切ったというわけではない。優に半時は経過しているだろう。

よく見れば、勉強机と壁との間に設置されたゴミ箱の中には、たくさんのカッターの刃が捨てられていた。

更に空っぽになった風邪薬の瓶と薬局の袋とレシートが捨てられている。

レシートを見る限りでは、二週間前に購入したと思われる。

ガチャ、誰かが帰ってきた。カサカサと袋の音がする。スーパーかどこかに寄ってきたのだろうか。

「ただいまー、眞弓、熱下がったのー？」

声から察するに母親だと思われる。

袋を置いた母親が“眞弓の部屋”に近いてきた。

とんとん、軽く二回だけノックする。返事は返ってこない。

「寝ちゃったの？ 眞弓？」

ドアノブを回してみると、ドアは開いたまんまだった。

ドアを開けたその先には、ぐったりと机の上に顔を伏せながら寝ている眞弓の姿があった。

母親は顔を覗くような形でそっと近くに寄る。

「駄目でしょ、ちゃんと布団で寝てなきゃ、ほら起きなさい」

母親は眞弓の体を揺らした。

眞弓の体が抗うこともないまま地面に倒れていく。否。落ちていく。

母親の視界から眞弓の姿が消えた。

地面で仰向けに倒れた眞弓の姿を母親は怪訝な表情で見ると、しかし、その表情にはどこか恐怖を感じている部分があった。

手首に付いた幾多に及んで重ねられた切傷からは血が固まっている。

机には乱雑して散らばるカッターの刃が何枚もある。

何より、眞弓が垂らしていた片腕の床下に血が滲んでいた。

声が息詰まり、顔が痙攣したかのように震え始めた。

「まっ、まゆ……」

いかれた眼球があちこちを捉える。どこに目を向けても脳裏に焼き付くは、鮮明豊かな血だ。

瞬間、息途絶えるように母親が気絶した。

救急車に搬送されたのは、それから一時間後の父親の帰宅時だった。

その頃には、もうとっくに眞弓は出血多量により絶命していた。手術室前、眞弓の自殺に気づけなかった母親の泣く声が、人気の少ない静寂の廊下に虚しく響いていた。

## 5 ギターを失った一七歳

翌日、訃報を聞いた眞弓のクラスだが、誰一人として泣くことはなかった。

メディアの扱いも悪く、地方のテレビだけという比較的小規模な扱いだ。

毎日当たり前のように訃報が流れる今日、人が一人死んだくらいで何を大袈裟な　　という麻痺した感覚があるのかもしれない。

その日の文藝部は眞弓の自殺の原因で言い合いになっていた。主に愛と人志の間でだ。

「あんたのせいでしょ。どう考えても」

熱く言い合う事はなく、両者共々至って冷静を装いながら言い合う形になっていた。

「何で俺のせいなんだ」

家族間で問題があったんだろ。人志はそう言うが、家族間で問題はないとはつきりと明言されている。

「あんたがネチネチと批評してたからに決まってる」

「決まってる？　笠原、お前は折笠君の何だ？　大して仲も良くないかったお前に彼女の何が分かるというんだ？」

「じゃあ、誰のせいだって言いたいの？　自殺なんて本人が追いやられる状況でもなければしないでしょ。フツー」

空気は最悪だった。反発し合う磁石と同じで二人の意見は絶対に一致しないだろう。

無関心な部外者二人は置いておくとして、こういう時の誠は本当に頼りにならない。優柔不断な性格が悪い意味で目立ってしまう場面である。

「クラスで問題があつたんだろ。あんな性格ならイジメの一つはあつても不思議じゃないだろ」

「あー、それはないよ」

腑抜けた声で割り込んできたのは、携帯電話をイジっている最中の悠里だった。

悠里は人志と二つ席を離れた場所に座っている。

「話してるとこ見たことあるからね」

アタシのクラスのやつとね。悠里は最後にそう付け足す。

友達間やクラス間での問題も無くなったと考えるなら、残る選択肢は一つしかないだろう。

しかし、人志は断固として否定の姿勢を崩さない。当たり前だ。

人志は悪意があつて批評をしたわけではない。真弓のためを思つて批評したのだから。それでいて殺人者呼ばわりされたらたまつたもんじゃない。

これが自殺である以上、最終的に命に決断を下すのは自分だ。いくら他人に追いやられようと、生きる術はいくらでもある。

と、自殺した者の気持ちを理解できない者なら思うだろう。

そういう者は大抵、理解したくもないし理解する気もない。などと半ば開き直りとも取れる考えをしている。

人志も“それ”だ。

眞弓の考えを理解していない。自殺した者の思考心理を理解しろと言われれば、確かに無理はあるだろう。

それが人である以上、他人の思考心理など読めるわけがない。だが、何事にも理解する気持ちは必要だ。

「フーかさ」

漫画雑誌を読んでいた礼二が読んでいたものを机上に置き、半開きしたその目を人志に向ける。

軽く茶色が脱色された黒髪は長く、全体的に犬っぽい印象がある。

「太宰の言ってたことって、本当に正しいことなのかよ」

「あー、それアタシも思った」

悠里は携帯電話を折り畳み、机上に置いた。

人志はあまり聞く耳をもっていない感じた。こいつらの言うことなんて。と上から目線で見ているのだろう。

「何がだ？」

「太宰が言ってたことって誰かが言ってたことなんだろう？ プロとかそういうちゃんとしたところで働いてる人のさ」

人志は文藝部唯一のプロの小説家志望である。

「当たり前だ。プロとしての作法が載ったサイトで知ったんだからな」

自信満々にそう答える人志だが、周囲の反応は予想外に冷たかつ

た。

しかし、人志は上機嫌のまま、自分は正しいことを言っているつもりでいた。

「いるよねー、こつこつやっ」

礼二は呆れ顔で口にする。

「太宰さー……、お前がそれを信用してるのは別にいいけど、それが正しいってわけじゃないだろ？」

礼二と悠里はパイプ椅子を引いて立ち上がり、

「他人を正そうとするなら、せめて、ちゃんとした正しいことを言  
つてやれよ」

今のお前、少し無責任過ぎるぞ。二人は仲良く退席した。

無言の間が流れた。

しばらくして、人志は何も言い残さずに退席した。

退席する直前、誠は人志を引き止めようとする。が、愛がそれを  
引き止めた。

「今のはあんまりだと思うよ」

誠はゆっくりと腕を下ろす。

「折笠さんは死んだのよ。あれくらい言われて当然よ」

後ろから掴まれていた手を、誠は振り払った。

「……僕は、よってたかって一人だけを責めることが当然だとは思えないんだ」

## 6 / レッドホットハニー

「一緒に帰ろう、人志！」

下駄箱前、誠は外履きに変えた直後の人志を止めた。前傾姿勢で膝に手を置きながら息を乱している。

その必死さに一度は情を移した人志だが、彼にも意地がある。そんな余計な意地が余計な一言を発しさせた。

「笠原と帰ればいいだろ」

えっ、誠は顔を面に上げた。

「僕、笠原さんとは何もないから別に……」

「隠さなくていいよ。付き合ってるんだろ、笠原と」

トントンと爪先を叩き、靴擦れを直した。

そして、誠に背を向けた。

「男と帰るんじゃないで、自分の女と帰ってやれよ」

その後ろ姿はどこか哀愁を感じさせた。誠は呆然と立ち止まったまんま、人志を見送っていた。

本当に取り残された気分に晒されたのは、どちらだろうか。

誠は背を向け、部室に足を運んだ。

その足並みは鉛を括くり付けられたように鈍重な何かを引きずっているようだった。

誠が部室に戻った時、待っていたのは性格に似合わずも気落ちし

た愛の姿だった。

ハンカチが机上に乗せられていた。少し泣いていたのかもしれない。

しばらくの間、誠は開けた扉の前で立ちっ放しになっていた。

「ごめん」

「何で有原が謝るの？」

「笠原さんを泣かしたのは僕だから……」

「有原は、私が悪く言ったから叱ったんでしょ。だったら謝る必要ないじゃん」

言葉のやり取りは終始息詰まった感じで感情の起伏もなく、一定調子だった。

「……ごめん」

「……ほら、またすぐそうやって謝る」

「……ごめん」

「有原はいつもそう。私と一緒にいる時もクラスの友達と話している時も他人の顔の色を窺って話してて、自分の言いたいこと言えない」

告白した時もそうなの？

愛は胸に押し込み続けていた思いを言葉にした。

違つ、とは言えなかった。  
そう、とも言えなかった。  
だけど、そう、なのだろう。  
愛は何も言わずに退席した。  
無言で通り過ぎた彼女を、誠は引き止めることができなかった。  
何も言わずにとも分かる。  
それが、答え、なのだ。

人志は自分の部屋にあるパソコンでアニメを観ていた。  
五畳一間のその部屋にテレビを置くスペースなど余っておらず、  
むしろ人志からすれば、パソコンさえあればテレビなど不要なので  
ある。

勉強机の前方の壁には、正式な賞の応募事項が記された紙が貼つ  
てあった。

×切までもう後わずかしかない状況だが、作業は全然進んでいな  
い。

人志は何度も同じ状況下に至っては次回に挑む形になっている。  
結果的に言えば、その次回が次回へと繰り越されて、結局は何も挑  
めてないのだ。

そんな人志が執筆作業より好きなものがアニメである。  
地上波の子供が起きてる時間帯のアニメくらいなら万人も観るだ  
ろう。しかし、人志の場合は深夜帯のアニメも観る。地上波に限ら  
ず地方局のアニメもだ。

そして、アニメを観ては公式サイト等に評価を書き込む。

アニメを観終えた人志は早速公式サイトに向かい、評価は書き込  
んでいた。

今回はいつにもまして作画が悪かった。手抜きとも思える場面が

いくつもあり、脚本も酷かった。後、声優の演技ももう少し良くはならないのだろうか。正直、スタッフは本当に作品に思い入れがあるのか疑問に思う。

ブラインドタッチなんかはお手の物。タイピングの速さも人並み以上はあるだろう。

人志は『書き込み』のボタンをクリックし、その評価を書き込んだ。

画面に表示された人志の評価の下、

今日の話はいつもより一段と面白かったです！

特に〇〇が〇〇と一緒に戦うシーンはしびれました（笑）

これからも頑張ってください！

というファンからの書き込みがあった。

「何も分かってないな。こいつは」

みたいな人は観なければいいのに……

たまにいるんだよねー、こういう何でも知ったかぶるバカ（笑）

無視したほうがいいよ。定期的に現れるんだよね。スタッフ気取り（？）みたいな人って。

人志の書き込みに対し、否定的な意見が三件も書き込まれた。

人志は反論に出ようとしたが、寸前で手が止まった。

これもネットで覚えた知恵だ。正しいわけではないのかもしれない。

そんな思いが人志の手を止めていたのだ。

礼二に言われた一言、人志は効いてないフリをしていたが、やは

りそれなりに効いてはいたようだ。

人志はネットを閉じた。

携帯電話を取り出し、

今、電話しても大丈夫か？

誠に一通のメールを送った。

7 腑抜け共の唄

早かったな。人志は玄関の扉を開けて誠を招き入れた。

誠は平淡な表情をしていた。ついさっきまで愛といざこざがあったとは思えないほどの平淡っぷりだ。顔には出ない性格なのかもしれないが、違うとしたら少し無神経な感じだ。

「来てくれるのはいいんだが、笠原とは帰らなかったのか？」

誠は玄関の扉を閉めながら、

「さっき言っただろう。本当に笠原さんとは何もないんだ」

そう口にし、靴を脱いで中に入る。

スリッパは用意されているが丁重に接するような関係でもないの  
で、そのまま上がってしまう。

その足で二階まで運び、突き当たりを右に曲がった所にある子供  
部屋へと入る。

先述した通り、丁重に接するような関係でないため、誠はベッド  
に腰を下ろした。

人志は回転式の椅子に座り、ベッドのある右斜め後ろを向く。片  
腕を机に乗せた状態だ。まるで診察する医者のようにだ

「昨日の○○観たか？」

人志が本当に話したいことは別にある。が、急には不自然と感じ  
たのかアニメの話から入った。

誠は人志に背を向け、近くにある本棚から漫画を物色していた。

「観たよ。昨日は原作で一番盛り上がった話だったよ。アニメだと動きが付くから一段と盛り上がったよ」

これにしよう。誠は漫画を一冊手に取る。そのアニメの原作本である。

「そっか……」

人志は重く煮詰まった表情を下に向けた。眉根に皺が寄る。

いつの間にかデスクに置いてあったはずの腕がご丁寧に膝の上で拳を握られていた。

公式サイト書き込みと同じく、誠も昨日のアニメに良かったと感想を口に出している。

俺は……、人志は今、否定的なそれと葛藤を繰り広げていた。

少人数に否定されただけでも自分の感性に疑問を感じてしまう人志であるが、たまたま感性の違う人間に当たっただけだとは、その時の人志には理解できなかったのだ。

「やっぱり、皆に言われたことを気にしてる？」

えっ、人志は顔を面に上げた。

「いつもの人志だったら、アニメのことで熱弁してくるからさ」

誠は漫画を閉じた状態でベッドの上に置き、人志の方を向いた。

「……誠も俺の言うことは間違ってると思うか？」

人志の中にあつた意地が緩やかにほどけていった。

それは緊張感と同じで、ほどければ素の自分になれるのだ。

「間違っているとは断言できないけど、正しいとも断言できないよ」  
誠は照れ臭さを誤魔化すように指先で頬を搔いていた。

「僕も人志もプロの編集者じゃないから、プロとしてどうかなんて分からないでしょ」

人志は顔を下に向ける。

「じゃあ、やっぱり俺がしてたことは……」

違うよ。誠は人志が言い切る前に否定した。

その否定が人志の窮屈な感情に隙間を与えたのだろう。再び顔を上げた。

「人志がしたことは正しいというより良いことだよ。だけど、言っていることが正しいかどうかは分からないってこと」

「……俺をかばうつもりで曖昧に答えてるなら止めてくれ」

かばってるつもりはないんだけどなあ、誠はやや困惑した表情で弱々しくそう主張した。

「プロの言うことが絶対とは限らないけど、少なくともプロとしてどうかを見定めるなら、実際にプロとして働いてる人の意見の方が正しいとは思えないかな？」

「それはそうかもしれんが……」

「仮に人志の言ってることがそのプロの意見と同じ内容だったら、それは正しいってことになるけど、プロの意見と違う内容だったら、それは間違いつてことになるんじゃないかな。少なくともプロとしてを見定めるならね」

たぶん、と誠は話を続け、

「堂島君が言ってた『無責任過ぎるぞ』ってのは、そのことを言うてたんだと思うよ」

ネットで言われてたことが必ずしも正しいとは限らないからね。最後に一言付け足してから話を終えた。

ピンポーン、呆気にとられていた人志の元に呼び鈴が鳴る。

生憎家族の者は仕事や私用で外出しているため、家には人志しかない状況だ。

ちよつと待っててくれ。人志はそう言い残し部屋を後にする。

取り残された誠は置いていた漫画を再読し始めた。

一階に着き、玄関に向かって扉を開けた。

「宅配便です。判子をお願いしますか」

そこには、宅配便の方がいた。

あ、はい。人志はリビングのタンスに蔵われた判子を取りに行き素早く持って帰ってきた。

配達物の詳細に判を押し、宅配便の方がそれを剥がし、ありがとうございましたと言い、足早に立ち去った。

人志は玄関の鍵を施錠し、配達物を見る。

速達で送られたそれは、A4サイズの封筒だった。しかもかなり分厚い。

中身は極めて軽量のもの。恐らく紙のようなものだろう。  
人志は差出人の名前を確認した。その名前は『折笠鞠江』  
真弓の母親からだった。

## 8 弱虫行進曲

封筒を抱えたまま、人志は部屋に戻っていった。

一人で見るのは怖いのかもしれない。家族に対し、眞弓は自分のことをどのように話していたのか。そんなことは家族の者に聞かなければ答えなんて出ない。

だが、これまでの自分の行いの過ちに気付いた今、思考心理が全てマイナスの方向に向かつてしまうものではないだろうか。

もし、本当に自分への恨みを文章に綴<sup>つづ</sup>られていたとしたら、当然、人志は正気でいられないだろう。

そんな正気でいられなくなった自分を少しでも支えてくれる存在がいれば

人志は甘えていた。

親しい友に甘えていたのだ。

そういう時、誠なら何か優しい言葉をかけてくれるはずだ、と。

部屋に着き、不安と期待を半々に抱きながら扉を開ける。

誠は読んでいた漫画をベッドに置き、人志が抱えるそれに気づく。

「折笠君の母親からだ」

人志はそう答え、封筒を机の上に置く。

「……帰ろうか？」

「いや、ここにいてくれ」

置いた封筒に手を掛けて封を開ける。

最初に手に取って出てきたものは、一通の手紙だった。

人志は三回に分けて折り畳まれていた手紙を開いて黙読する。

このような形で渡すことになってしまったことを先に御詫び申し上げます。

はじめまして、太宰人志君。眞弓の母です。いつも眞弓から話を聞いております。

部活動の時もそうだったとは思いますが、眞弓は人と接することが得意とは言えない子でした。

恥ずかしながら、私は仕事の関係上、眞弓となかなか話をする時間がとれなかったのですが、話をする時は常に太宰君のことを話していました。

嬉しそうに話している姿を見た時、私達は眞弓の本当の笑顔を見た気がします。

この封筒の中身は眞弓が取っておいたものです。

眞弓はいつか太宰君に見せるために、これを取っておいたのだと思います。

厚かましいことは承知の上ですが、眞弓のためにも、どうか受け取ってやってください。

お願いします。

開封した封筒の中身は、その一通の手紙と優に百を超える枚数の未発表作だった。

人志はごっそりと未発表作を取り出し、膝の上に置く。

冒頭の部分に軽く触れた時、我慢していたものが一斉に込み上げてきた。

喉が窮屈に締め付けられ、体温が上昇する。

鼻を刺激した痛みが涙腺に直撃する。固く拒んでいた涙腺は脆く切れる。

原稿用紙の上に点が落ちた。

手の平で顔を覆い隠し、鼻を軽く啜る。

こんなもの、まともに見れるわけがなかった。

いくら批評を受けようとも必死になって努力してきた眞弓のそれを、努力も何もせずになだダラダラと“批評家ごっこ”をしていた人志に見ることなんて、できなかつたのだ。

人志が目指すものは、批評家ではなく小説家だ。

そんな初歩的なことを長い時間忘れてしまっていた。

銃の使い方を知らない少年が誤射した弾丸は少女の胸に直撃し、  
敢え無く命を落とす。

## 9 小心ストリップ

初秋の夜は午後七時を過ぎた辺りでも、まだ少しだけ明るかった。玄関の電球は自動的に点灯し明かりを着けていた。

誠はその玄関の明かりに照らされていた。足元に家内の人工的な光が扉の形をなぞって照らされている。

扉の取っ手を支える人志が誠を見送りしているのだ。

「すつきりした？」

「おかげさまでな。こんな時間まで居てもらってすまなかつたな」

「いいよ。気にしなくて」

どうせ暇だったし。誠は話にオチを付けた。

暇か……、人志は苦笑しながらそう呟いた。それに対し、誠は首を横に傾げている。

「これからはそうも言ってもらえなくなるな」

人志は二倍努力しなければならぬ。むろん、それは義務ではないし強制でもない。

一人の謙虚な努力家の死を無駄したくない。その一心が人志を動かしていたのだ。

それは彼なりの罪滅ぼしなのかもしれない。それで彼女が生き返るわけではないし許されるわけでもない。

だが、だからといって何もしないままでは、今までの自分と何一つ変わらないのだ。

自分を変えさせてくれるきっかけをその身をもって与えてくれた、

彼女へのせめてもの恩返し。

眞弓の分まで人志が小説家で頑張り続けること。前進あるのみだ。

「……あ、そろそろバスが来るや。じゃあ、また明日」

明日は休みだろう。人志にそう突っ込まれる。

あっ、そっか。誠は素でボケていたようだ。

人志に背を向け、誠はバス停のある方へと足を進める。

ガチャ、背後から扉を施錠した音が鳴る。後惜しむように丁寧に施錠した感じだった。

さすがにこの時間帯にバスを利用する客は少ないようで、バス停には誠一人しか居なかった。

緩い坂道の途中にあるバス停で、近くには一軒家が点々と並んでいる。

後五分もすればバスが来る。誠はポケットから携帯電話を取り出し電源を入れた。

誠は学校では携帯の電源を切っているのだ。携帯を必要とする人とは会っているのだ。

照明が着き、待ち受け画面が表示される。

半ば強制的に設定された愛とのツーショット写真。普通ならこれだけで付き合っていると怪しまれてもおかしくないのだが、誠は学校では携帯を使わないため待ち受けを見られたことがないのだ。

そもそも誠は他人の携帯を勝手に覗き込むような友人とは付き合っていない。

一通のメールを受信していた。

誠は受信完了と同時に本文を開く。

愛からのメールだ。時間は約一時間前、バイトの休憩中にも送

ったのだろつ。

愛とは、つい数時間前に気まずい状態になったばかりだ。メールのやり取りをできるのも奇跡的と言える。

「八時に本堂神社に来て」

メールの文章を声に出して読む。

本堂神社は二人にとって思い出深い場所だ。

中学三年の元旦、数名の友人達と一緒に初詣に行った日に、愛は誠に告白した。

僕でよければ。誠はそう返事をし、二人は付き合うようになったのだ。

だが、その時の誠は断ると愛に悪いと思って断れなかったのだ。

特別嫌いというわけでもないのだが好きというわけでもなく、話しやすい友達として付き合っていたかった。それが誠の本音である。

午後七時二十分。バスが来た。

このバスに乗れば、誠は家に帰れる。

本堂神社に行くならバスには乗らず、少し歩かなければならない。バスが停車し、扉が開く。

頭の中で愛の音声付きの本文が<sup>ひだまり</sup>読んでいた。

中からバスの運転手が不機嫌そうな声で訊いてくる。

「乗るの？ 乗らないの？」

相手からすれば迷惑な客にしか見えないだろう。ただの冷やかしかだ。

その不機嫌な声に待たせては悪いと感じたのか、誠は踏み台に片足に乗せた。

しかし、

有原はいつもそう。私と一緒にいる時もクラスの友達と話している時も他人の顔の色を窺って話してて、自分の言いたいこと言えてない

誠は踏み台から足を下ろしていた。

「すみません。やっぱりやめておきます」

運転手に一言詫びを入れる。

運転手は呆れた表情を前に向け出入口を閉めた。

午後七時二十三分。

一台のバスと共に、少年は走り出した。

10 平成マシンガンピッキングブルース

つい数十分前までは明るさが残っていた景色も、今は完全に夜の闇に染まっている。

木造の建物の前に賽銭箱があり、その下に石段がある。

愛はそこに座っていた。

表面が粗い石で造られた道の上で誠は立ち止まっていた。

階段が上がってきた足音でその存在に気づいていた愛は誠を見ている。

愛は制服のままだった。

「風邪引いちゃうよ」

長袖の白いブラウスにチェックのミニスカートという格好だ。いくらまだ夏の暑さが残っているとはいえ、その格好では風邪を引いてしまうだろう。

「大丈夫。それより早くこっちに来て座りなよ」

言われるがままに誠は愛の傍に座った。

愛の手には缶コーヒーが握られていた。ホットコーヒーだ。

やはり寒いのだろう。

誠はスクールバックの中からブレザーを取り出し、愛の肩にソッと掛けた。

「……ありがとう」

照れ臭そうに愛は礼を言った。体を丸めてブレザーをギュッと抱き締めている。

「こんなところに呼ばなくても、先に言えば笠原さん家に行ったのに」

「家は嫌だ。親帰ってきてるし」

それに、愛はそう付け足し、

「ここが一番良かったから」

と、口にした。

別れよう。誠は直感でそう告げられるのだろうと思っていた。始まった場所で終わろう。そういうつもりなのだろう。

しかし、誠は別れ話を告げられると分かっていた。

別れるきっかけを生んだのは他の誰かでもない、誠本人だ。

優柔不断な誠でもそれくらい分かる。

「有原って私以外の誰かで好きな人いる？」

「いないよ」

「芸能人とかでも別にいいよ？」

「それでもいないよ」

そっか……。愛は安堵の入り混じった声で呟いた。

誠は斜め上を向いていた。そこには何も無い。

愛が誠に近寄った。空いていた隙間が無くなる。

面と向き合うのは恥ずかしいのか、二人は互いに違う方を向いていた。

「私は有原とまだ……」

「告白された時は、正直言つと付き合いたくなかったんだ」

誠は愛の言葉を掻き消し、その話を切り出す。顔を地面に向けている。

愛はブレザーの袖を力強く握り締めていた。体の中から込み上げてくるそれを我慢するためだろう。精一杯の抵抗だ。

「でも、今じゃ付き合い合つてよかつたつて思つてる」

誠は愛と真つ直ぐに向き合つた。

「さつき好きな人を訊いたよね。僕は笠原さんが好きだ。これからもずつと付き合い合つていたい」

三年という月日は無駄ではなかったようだ。

彼女の魅力を知り、次第に惹かれ合つていた。

誠は自分に正直になれない性格をしている。が、愛と付き合い合つたことから彼は自分でも気づけないほど小さな何かをもらつていたのだ。

傍らで泣く彼女の背中を誠は優しく擦つてあげていた。

愛が落ち着いたところで誠は立ち上がろうとするが、愛はそれを止めた。

その場の雰囲気かと言うべきか、誠は愛の柔らかいそこへ近づき軽く触れた。

しばらく息を止めて、離す。

「初めてだね。有原からしてくれたのって」

誠は急に自分のしたことに恥ずかしさを感じていた。

「明日は学校休みだから……もう少しだけ一緒にいよう」

結局その日、二人が家に帰ることはなく、部活仲間と話するような他愛もない話題に終始没頭し、一夜を共に過ごしていた。

文化祭前日の放課後。

誰もいないその教室はすっかりと綺麗に掃除されており、中心に堂々と構えられていたテーブルも折り畳まれて蔵われていた。

四角い空間だけが残った、その教室の扉付近に机と椅子がセットで置かれており、後一つ窓際に二個連結してセットされている。

その連結された机の上に、百ページほどの小冊子が五十冊ほど積みまれている。

『平成マシンガンピッキングブルース』

エレキギターをマシンガンに見立て、前方の敵を射撃するように構える。そんな軍人被りの彼女がモノクロで描かれた表紙が何とも印象的だ。

彼女はマシンガンを射撃する。

果たして、彼女は何に向けて、そのマシンガンを射撃していたのだろうか。

## 10 平成マシンガンピッキングブルース（後書き）

こんにちは、作者の谷淵流です。

本作は2008年4月17日から同月25日まで連載していた短編小説です。

作者の作品では一番短い連載作品となったのですが、それだけに本作は思い出深い作品になりました。

打ち切られた作品みたいな終わり方をしていますが、別に打ち切ったわけではないです（笑）

こういう何かを問いかける形の終わり方は作者の作品では珍しいです。そういう点から見ても、やはり思い出深い作品ですね。

結局のところ、作中のような編集者気取りの評価が役立つかどうかなんて本人次第なわけなんです。人を正そうとするなら、せめてちゃんと正しいことを言うべきじゃないかと自分は思います。評価は感想とは違い、作品同時に作者まで評価することになりますからね。

そんなわけで本作はこれにて終了となります。

これを読んで何か感じたことがありますか？

無ければ無いでもいいんですが、良くも悪くも何か感じ取ってもらえると幸いです。

短い間でしたが、応援してくれた方、本当にありがとうございました！

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1000e/>

---

平成マシンガンピッキングブルース

2008年8月13日20時31分発行